小口千明・清水克志　編
『生活文化の地理学』
古今書院　2019年３月　210頁　2,800円＋税

本書は編者の一人で2019年３月をもって筑波大学人文社会系の定年退職を迎えた小口千明教授の記念論集として企画編集された。小口は『日本人の相対的環境観―「好まれざる空間」の歴史地理学』を著したことからも分かるように，周囲を取り巻く様々な空間や環境への評価が時代や社会状況によって変化していく人々の様子を描き，追究してきた。そして小口が本書の第１章の総論でも述べているように，「より人間味のある地理学研究を目指したい」との思いで取り組み続けてきた小口の研究と教育の集大成と言える。本書は地域に生きる人々の多様性，生き生きとした姿，そしてその通時的変化を通して現代に暮らす我々との価値観の相違を明らかにする人間生活の舞台，換言すれば人間を取り巻く環境を描くと同時に，舞台上で生きる人間の姿そのものを描き出そうという問題意識，コンセプトに基づく一冊となっている。生き生きとした人々の姿を描くことにより，人々の声にならない思いや言葉にならぬ感情までもが生活文化の中から浮かび上がり，我々の眼前に鮮やかに顕現するのである。

さて，ここで本書の構成を示しておく。本書は４部構成で合計14の章と８のコラム，あとがきから構成されている。

第１章　総論　地理学が描く生活文化　（小口千明）
第Ⅰ部　食べる～食文化～
第２章　ツケナの地域的多様性とその変化　（清水克志）
第３章　水産缶詰製造業の展開からみた日本の魚食文化　（清水克志）
第４章　在来小蜜柑から温州蜜柑への転換　（豊田紘子・伊藤大生）
コラム１　在来種「戸隠大根」の復活　（中澤日向子）
コラム２　「三崎名物のマグロ料理」をめぐる価値観の変化　（小口千明・武田周一郎）
第Ⅱ部　暮らす～環境と生業～
第５章　天竜川下流域住民の洪水への備えと対応　（山下琢巳）
第６章　江戸時代から明治時代の三浦丘陵における里山の変化　（武田周一郎）
第７章　山梨県丹波山村にみる山村の生活文化　（清水克志・加藤晴美）
第８章　海域利用の垂直的拡大と地域変化　（花木宏直）
コラム３　漁場としてみた沖縄沿岸の自然環境　（花木宏直）
コラム４　開業助産師の活動と施設分娩への変化　（金崎美代子）
第Ⅲ部　集う～観光～
第９章　世界遺産飛騨白川村における地域イメージの形成とその変容　（加藤晴美）
第10章　日本における海水浴の受容と海岸観光地の変化　（小口千明）
第11章　「小江戸」川越の形成と蔵造りの町並み　（高橋珠州彦）
コラム５　草津温泉にみる入込み湯から男女別浴への変化　（中村亜希子）
コラム６　土浦花火大会と地域商業　（原野菜香）
第Ⅳ部　遊ぶ～非日常の空間～
第12章　伊賀上野城下町の鎮守社とその祭礼の変化　（渡辺康代）
第13章　大崎下島御手洗町における遊郭と地域社会　（加藤晴美）
第14章　横須賀における米軍向け歓楽街の形成と変化　（双木俊介）
コラム７　谷田部市街地の往時のにぎわいとその名残　（高橋　淳）
コラム８　日本における折り紙の普及　（伊藤行將）
あとがき（清水克志・加藤晴美）

本稿では紙面の関係で章ごとではなく部ごとに内容を概観していく。

まず第Ⅰ部では，そのタイトルが示すように，「食」に関する価値観や習慣，まなざしの変化について，近代の統計資料を用いた空間分析が行われている。清水は第２章でツケナについて，明治時代の都市近郊園芸の発達や日清・日露戦争といった政治的，社会的な影響を受け，人々の嗜好

や食生活の地域ごとの多様性と変化について，第３章では銚子を事例に水産缶詰製造業の変遷を通じた近代日本の魚食文化の変遷とその背後にある政治的，経済的要因について，それぞれ論じている。また，豊田と伊藤は第４章で近世から近代にかけての小蜜柑ならびに温州蜜柑の生産量の変化を人々の嗜好の変化や縁起に関する価値観，輸出状況の変化に着目して考察している。そして，二つのコラムでは中澤が戸隠大根を事例とする地域の在来種の野菜の復活とブランド化について，小口と武田が神奈川県三浦市三崎のマグロ料理をとりまく人々の価値観の相違と変化について，それぞれ論じている。

つづいて第Ⅱ部では，二つの変化―周囲をとりまく環境の変化と人々の日常生活や生産活動の変化―の相互関係について近世から近代にかけての時代を対象に論じられている。山下は第５章で近世の天竜川下流域の住民が災害時ではない平時にどのように洪水に対応した背景について，下流域の複数の村落のネットワークの存在を通して明らかにしている。また，武田は第６章で三浦丘陵の植生変化の背後にある，近世から近代への時代の変化に伴う新たな社会経済的状況が別の植生を生み出したことを明らかにした。第７章では清水と加藤が山梨県東部の山村を事例に，平地の論理とは異なる山地の価値観や生産活動，生業の条件の存在を明示した。第８章では花木が器械潜水の導入を契機とする東京湾岸の集落における生業の変化を明らかにした。また，２つのコラムでは花木が漁場としての沖縄沿岸の自然環境と生活文化について，金崎が高度経済成長期の急激な社会経済的情勢の変化の中で見られた開業助産師の活動の変容について，それぞれ取り上げている。

第Ⅲ部は観光地をめぐる人々の認識の変化について大正期から昭和前期にかけての飛騨白川村，近代日本の海水浴場，川越の「小江戸」としての位置づけの変化と観光開発の事例研究および二つのコラムで構成されている。第９章では加藤が飛騨白川村のコミュニティと合掌造りについて，近代を通じてその評価が大きく変わっていったことや，その変化が合掌造りの観光資源化に及ぼした影響について考察した。第10章では小口が近代に新たな健康法として導入された海水浴の内容の変化が，海水浴場の立地と人々の海水浴場の選択にあたえた影響を明らかにした。第11章の高橋の論稿では小江戸として認識されている川越の町並みをめぐる地元住民の価値観と地域経済の変化，とりわけ観光開発との関係性を明らかにしている。そして，観光地をめぐる人々とりわけ地域住民の価値観の通時的な変化について，中村が草津温泉の入込み湯を事例に，原野が茨城県土浦市の花火大会の広告を事例に，それぞれ考察した。

最後の第Ⅳ部は，外部から集う人々と地元の人々とが交錯する中で生じる新たな非日常の空間とその変容がテーマである。第12章では渡辺が伊賀上野を事例に，空間構造の変化が見られた近世城下町の住民の生活文化が祭礼という非日常的な催しの中に反映されていた様子を明らかにした。加藤は第13章で近代の地方沿岸都市における遊郭と地域社会との関係を考察し，周辺社会から隔離されることのなかった遊郭の人々と地元社会の人々との交流や関係性について論じた。第14章では双木が第二次世界大戦後の横須賀に誕生，発展，衰退した米軍向け歓楽街について考察し，都市景観の変化から人々の「まちらしさ」についての認識の変化を解読している。Ⅳ部のコラムでは高橋が茨城県つくば市の谷田部市街地のにぎわいとその名残について，伊藤が近代日本における折り紙の普及について説明している。

このように，本書は４つの大きなテーマごとに著者の問題関心や専門性に基づく論考によって構成されている。いずれのテーマそして論考も単に統計や資料の読解のみに終始することなく，そこから人々の価値観，営み，すなわち生き生きとした姿にまで迫ろうとしている。同じデータを用いて考察するとしても，著者の問題意識によってここまで大きく変わるのであろうか，と感嘆せずにはいられない。

その一方でいくつかの疑問点が浮かび上がった。ここでは個別の章とコラムへの疑問点は紙面の関係で省略し，全体に関わるものを３点ほど述べておきたい。

１つ目は，宗教に関連するトピックについてほとんど触れられていなかった点である。これは評者が宗教を研究対象としてきたからそう思ってしまうのかもしれないが，それを差し引いて考えたとしても，人間の生活文化を検討するうえで「宗教」や「信仰」は極めて重要なテーマであるとい

える。第12章は近世城下町の空間構造の変化と祭礼との関係性を考察しているが，本書の様々な事例においても，そこに暮らした人々の日常的な信仰的側面や宗教的要素が少なからず関わってきたはずであるし，宗教的な価値観や観念も時代とともに変化してきたはずである。これは生活習慣や民俗とも関連するテーマであることから，可能ならば「食べる」「暮らす」「集う」「遊ぶ」に「祈る」とか「信じる」といったテーマの部と章を執筆していただきたかった。

2つ目はデータについてである。詳細は省略するが，あるテーマの通時的変化を検討する場合に，種類ごとに時代範囲が異なる複数のデータが用いられている場合や，特定の年代のデータについて地図化されていたりされていなかったりする場合がいくつか見られた。データの制約やページ数の制限の関係でやむを得ないと考えられるが，本書の中心的なコンセプトは「通時的な視点」であるので，データの更なる発掘と取得が今後一層求められよう。

3つ目は，生活文化というキーワードについてである。今更定義するまでもないのかもしれないという意見もあろうが，どの立場からみた生活文化であるのか，というもう一つの問いが重要であると評者は考える。第Ⅰ部と第Ⅱ部では，そこで日常的な暮らしを営む人々にとっての生活文化が論じられている。それに対して第Ⅲ部と第Ⅳ部では，日常の中で外部世界の人間を迎えるホスト側である住民と，非日常を楽しむために特定の場所を訪れるゲスト側の人々との関係性の中で構築されてきた生活文化が扱われている。後者をみた場合，そこに見いだされるのは日常／非日常，ホスト／ゲスト，地元住民／外部者といった二元的な生活文化である。しかも，日常生活を送る地元住民にしても外部者にしても，多様な立場の人々が存在してきたはずである。そうすると，実は多元的な生活文化がそこに展開されていたということになるが，こうした多元性は研究者から見た第三者的なものであり，当事者のうちの誰の立場から見た生活文化なのかをどこかの段階で整理し，定義づけることが必要ではないだろうか。もちろん，多様な個々人によって形作られてきた総体としての生活文化という視点もあれば，バークレー学派の超有機体説[1]のような視点―個人の意思を超えた存在としての生活文化という視点―もあり得るかもしれない。いずれにせよ，生活文化というキーワードの定義の議論が必要かつ重要になると考えられる。

最後に，本書が我々にとってどのような意味を持つのかについて考えてみたい。冒頭でも述べたように，地域に生きる人々の生き生きとした姿を描く試みは従来の硬直化したディシプリンでは限界があったように思われる。もちろん，人々の活動を統計的に表示した定量的で客観的なデータ，合理的選択をする人々，などの前提は地上における人間活動の様子を解明する上で必要不可欠な要素であり，そこから得られた多くの優れた研究成果を否定するのではない。しかしながら，従来の研究では人々の生き生きとした姿を描き出し，名もなき人々の声や思いをくみ取ることが必ずしも十分ではなかった事もまた確かである。地理学はともすると人間不在となりがちな面があるが，本書はこの地理学の弱さを乗り越え，生き生きとした人々の姿を描き，声にならない思いや言葉にならない感情を紡ぎだす確かな，そして大きな「一里塚」といえよう。

（麻生　将）

〔注〕

1）高橋伸夫・田林　明・小野寺　淳・中川　正『文化地理学入門』東洋書林，1999，23-26頁。